

論文要旨

寺山修司の演劇媒体を通じた制度解体

久保 陽子

本研究は、寺山修司（一九三五～一九八三）の演劇作品を主な分析対象として、虚構を通じて行った様々な制度解体の方法を考察するものである。寺山が演劇実験室・天井桟敷（一九六七～一九八三）を創設した1960年代は、従来の演劇に対して新しいアンクラ演劇が台頭し、また社会文化的にも抵抗の時代であった。そうした時代を背景に寺山は現実社会ではなくあくまでも演劇という虚構を通して制度解体の方法を模索しており、それをターゲットが異なる三つの時代に分けて分析、考察した。

第一部「制度化された身体へのゆさぶり」では、〈普通ではない〉身体を登用し、「等身大」という概念を揺さぶり、既成のジェンダーやセクシュアリティ、家族制度を解体しようとした初期の実践を考察した。

第一章で取り上げた「青森県のせむし男」（一九六七年）では、「見世物の復権」というコンセプトが舞台における祝祭性の演出のみならず、戯曲においてもそれが実現されていることを確認した。伝統的な〈母もの〉作品のパロディとして、自己犠牲的な母親像、甘美な母子の物語、慣習的な家制度を相対化し、価値転倒を目論んだ祝祭的なテキストといえる。

第二章で取り上げた「大山デブコの犯罪」（一九六七年）では、過剰な語りによって膨張し続ける身体の幻想性と、実際の舞台に登場する身体とのずれによる空虚さを表象し、身体の構築性を告発している。また男性の身体を問題化することで性の非対称性を攪乱するとともに、言葉を切り刻み言語を無化し、知の下位に置かれた身体をパフォーマンスによって復権しようとする試みであった。

第三章で取り上げた「毛皮のマリー」（一九六七年）では、「男／女」をはじめとする様々な二元論を退ける「男娼^{クイア}」な表象が、主人公のみならず、物語においても一義的な解釈を拒む揺らぎとして表出されている。「母子」関係の構築性を疑い、ひいては価値や意味というレッテルの剥奪がなされ、二項対立に収斂しない価値の多様性に拓かれたテキストであるといえる。

第二部「演劇という制度の脱構築」では、作品や舞台の中での制度解体がより拡張され、演劇の外側の日常へと向かっていった中期の活動に焦点を当てて、演劇の制度そのものの解体を論じた。

第一章では、演劇の方法を大きく変容するに至った、同時代的な海外の前衛芸術との影響関係を確認した上で、この時期に構築された演劇論を「出会い」というキーワードで読み解きながら、その実践としての市街劇を取り上げた。演劇の四要素である観客、俳優、戯曲、劇場を解体し、演劇を市街という日常空間へと拡張した市街劇では、回を重ねる毎に虚構による「現実原則の変革」の試みがより先鋭化していく一方で、現実社会という強固な磁場によって虚構が侵食されており、虚実の境界のせめぎ合う限界での実践であったことを明らかにした。

第二章で取り上げたのは実験的な市街劇と対照的な商業演劇「青ひげ公の城」（一九七九年）である。観客の想像力を喚起させ積極的な解釈者にすべく、不在や中断といったテキストの空白を設定し、またメタシアターという二重化によって虚実を混交させ、その位相を操作することで虚構を観客の日常へも連結させるという、演劇の制度内で「出会い」の演劇論を實踐するテキストの戦略を抽出した。

第三部「自己の解体」では、制度解体という問題意識が、統一的な「私」へと向かっていった後期の作品を取り上げた。「私」の不確定性を様々な手法で表象することで「私」とは何かを問うたものである。

第一章では、映画「田園に死す」（一九七四年）を取り上げた。映画監督「私」の自伝的映画の編集行為に置換される「記憶の修正」は、〈自伝〉における自己と表現的自己の葛藤として表象され、さらに無意識の表象である「夢」を模し、「私」の欲望を歪曲した形で映像化している。

第二章の「奴婢訓」（一九七八年）では、主人の不在の物語が、劇作家の不在、統一的な筋の不在、さらには「私」の不在として展開する。また舞台における「主人ごっこ」というパフォーマンスは、俳優の役柄交換や機械と身体の交換によってアイデンティティを中断、異化し、「私」という中心の不在を表象している。

第三章では、「私」の存在を壁によって表現した「レミング」（一九七九年）を取り上げた。壁消失によって主人公が自己同一性を失った先には、演技や夢や虚構を「私」の変革の契機として賭けながらも、それもまた社会的監視によって規定されてしまう「私」の葛藤の様相が描き出されている。

このように寺山の制度解体の方法は、〈いま・ここ〉という現前性と、現象の記号化という演劇媒体の特徴である二重性を巧みに利用し、紛らわしく虚実を錯綜させ、虚構による表象を現実の変革へと連結させる試みであった。それは演劇表現の本質を付き詰めたものであり、かつ既成の制度を攪乱する挑戦であったといえる。